

「絶体絶命は打ち出の小槌」



©福垣淳也

日時：令和2年1月26日(日) 14:00~15:35
会場：こうち男女共同参画センター「ソーレ」 大会議室

講師 小島 慶子 さん (タレント・エッセイスト)

1972年オーストラリア生まれ。学習院大学法学部政治学科卒業後、1995年にTBSに入社。アナウンサーとして、テレビ、ラジオに出演する。2010年に退社後は各種メディア出演のほか、執筆・講演活動を精力的に行っている。『AERA』『VERY』『日経 DUAL』『日経 ARIA』など連載多数。著書に『解縛』『るるらいらい』、小説『ホライズン』ほか多数。現在は、東京大学大学院情報学環客員研究員として、メディアやジャーナリズムに関するシンポジウムの開催なども行っている。2014年より、オーストラリア・パースに教育移住。



今年は、小島慶子さんからピンチをチャンスに変えてきた経験をお話しいただきました。講演の一部要旨を紹介します。

【アナウンサーを選択したきっかけ】

私は1972年に父親の駐在先であるオーストラリアのパースで生まれました。その時はまだ白豪主義の時代で、アジア系の人には白人よりも劣っていると考える人がいましたが、翌年からは多文化政策をとり、世界中から来た人と対等に互いを尊重し仲良く暮らそう、と変わっています。

4歳で日本に来て、学生時代は日本で過ごしてきたわけですが、私が就職活動をしていた1993年は、女性が長く働くことはまだ当たり前ではなく、働いたとしても2、3年したら寿退社することが幸せだと言われていた頃でした。

その頃に経験した初めての失恋がものすごく悲しくて、その悲しみの理由が何なのかと自己分析した結果、最大の理由は銀行員の妻の座を逃したことであったと気づきました。付き合っていた人は銀行に就職が決まっていたんです。そこで、男性を肩書きではなく「その人の魂が好き」という理由で選ぶためにどうすればいいのかを悩んだ結果、自分の得意な仕事で男性と同じ給料をもらい働き続けることで、お金のことを期待せず一番好きな人と結婚ができると考えつきました。当時、男女雇用機会均等法が施行さ

れ約7年が経過していたこともあり、玉の興志向をやめて自分が働こう、と180度考えが変わったわけです。今もそうですが、当時の日本は目に見える男女差別は少なくとも、まだ女性が不利益な立場に置かれることが多かったため、経済的な自立は狭き門でした。そこでなるべく自分が受かりやすい仕事をと考えて筆記試験よりも実技と面接審査が重視されるアナウンサーを目指しました。

【いくつもあったジェンダーの壁】

かくして、男性と同じ待遇の終身雇用の正社員の座を手に入れた私は、「これでどんな人とでも結婚できる。男性と対等だから、女のくせになどと言われることもない」と、期待に胸を膨らませて入社したわけです。

そんなある時、お天気コーナーの最後にコメントを言う時間をもらいました。夏の終わりだったため季節感を考え、「セミが道路に落ちて死んでいると思って、近づくと急に飛んだりするので気をつけてください」とコメントしたら、ディレクターに「新人女子アナらしくない。もっと女子っぽくかわいいコメント言えないの？」と、頭ごなしに怒られて、とても腹が立ちました。誰が新人女子アナらしさを求めているのか？これは私が生まれて初めてぶつかったジェンダーの壁です。



ジェンダーは、社会の中で「男はこういうもの、女はこういうもの」「男はこうであれ、女はこうであれ」と求められるもので、それによって制度が作られたり、あるいは制度には書かれなくても不文律の規範になっています。この時、私も初めて若い女子というのはこうあるべきだという枠にはめられたわけです。

ある時は、深夜番組で30歳位から下の女性アナだけが、バニーガールの格好で踊れと言われました。これは、若い女性をセクシーな格好で踊らせたら面白い、と考えられた企画でした。しかし、アナウンサーは言葉で情報を伝えるプロだと教育されていたため、私がダンサーやモデルならばともかく、なぜこんなことをやらされるのか当時は分かりませんでした。

その状態に鬱屈した私は、髪を短くして、化粧も一切せず、スウェットにワークパンツで出勤する、と自分なりに反抗していましたが、明らかに仕事が減ってきました。更に、その頃のゴールデンタイムの仕事で、今でいうセクハラを受けたことに嫌な顔をしてプロデューサーから皆の前で怒鳴られたことで、もうアナウンサー的には終わり。この先どうしていけばいいのだろうか、それこそ絶体絶命だと感じた私は、女性上司に相談しました。

その上司が「女性だって優秀でいろんな才能がある人がいるのに、あなたの気持ちはよく分かる。あなたに合う仕事を私が探すわ」と言って、「ラジオっていいわよ。きっと合うと思うからやってみなさい」と勧めてくれました。

25歳の時に、「小島さん、週に4日のラジオの生放送で時事問題や社会問題を討論する番組の司会をしてくれないか」と言われたのです。始めたら、半年で日本の放送業界で一番大きなギャラクシー賞のDJパーソナリティ賞を、個人でもらいました。そこから急に周りの態度が変わり、このあいだまで私のことを怒っていたディレクターまで、「小島はやると思っていた」と言ってきたり…。以来、人の評価なんか気にしないようになりました。

でも、当時からテレビとラジオの両方をやっていて、どちらの私も同じ私なのにおかしいとも思いました。テレビだと生意気とか、出しゃばりすぎと言われ、同じことがラジオでは面白かったと言われる。なぜこんなに評価が違うのだろうと考えると、一つには若い女性という見た目が邪魔をすると気づきました。

その点、ラジオでは見た目は関係なく、話の中身に集中し耳を傾けてくれる。男性アナウンサーなら若くても、服装で生意気とか目立とうとしているとか見た目と言われない。一方テレビでは、若い女は見て

楽しむものだから見て当たり前、何かあれば文句をつけて当たり前という考えが強かったんですね。

確かに私の顔はアナウンサーに向けていそうだと思ったので、使えそうなものは何でも使おうと思ったけれど、だからと言って外見について人から何を言われてもいいとは思いません。とやかく言われる筋合いはないのに人からこんなに言われるのなら、若い女の外見なんていらぬ、と思いました。これも今思えば「女性は見た目には価値がある」というジェンダーの押し付けに対する怒りでした。でも、そこからラジオでキャリアを築いて活躍することができたので、一度アナウンサーとしてどん底を味わった経験も悪くはなかったと思っています。

【私の中にもあった問題】

アナウンサー時代はそんな絶体絶命が意外な転機になりましたが、最近では、家族の出来事があります。私は2010年に会社を辞めフリーでやってきましたが、その3年後、夫が「僕も仕事を辞める」と言い出しました。

その時は、こんなときのために経済力を身につけたのだから、無職の夫でも全然構わないと思っていました。けれども、目の前に年収も肩書きもゼロの丸腰の男性が出現した途端、稼ぎがあり肩書きがある男性しか尊敬できないと思っていることに気がついてしまいました。長い間、男性と対等な立場で高いお給料を貰っているうちに「稼いでいる人間がえらい」という考えに染まっていたのです。

例えば、働いて帰ってきて、夫が家で子どものお世話をしてくれていても、「ああ今日も1日大変だった、お金を稼ぐって大変、あなたは楽でいいわね」とか、夫が物を欲しがれば「買ってあげる」などと、恩着せがましくしたり。それまで多くの女性がそうやって差別され、ばかにされてきたことに、ずっと腹を立てていたのに。自分が同じことを夫にしていることに気がついて、ショックでした。

これまで、主な働き手は男性で、女性は家庭を支えるものだと言われてきました。経済的な強者が偉いと言われてきた。男性と同じように働いてきた私の中にも、「よりお金を稼いでいる人、肩書きが高い人が偉い」という価値観が刷り込まれていたのです。性別ではなく、立場や役割がそうさせてしまうのですね。

そんな自分を変えたくて、無職の夫を尊敬できる環境を作ろうと思いました。そこで、海外に移住することにしました。両親からパスはとても楽しくきれいなところだったとよく聞かされていたこともあり、自分が生まれた場所に戻り、家族はそこで暮らし、自分が行き来して子どもを育てようとパスに移住を決めました。夫は子どもたちを支え、新しい生活環境を整えました。同じ冒険に乗り出すことで、家族の結束力を強めようとしたのです。それからの6年間、夫は家事をしながら英語の勉強をして新生活を立ち上げ、子どもの世話を頑張ってくれました。この経験を通じて、生まれて初めて年収も肩書きもゼロの男性を尊敬し、この人が

いて良かったと思えたのです。夫が無職になり世帯収入も大幅に減って大ピンチ！になりましたが、夫が仕事を辞めたからこそ自分の偏見に気づくことができ、家族の新しいチャレンジができて良かったと思っています。

